

# 異文化コミュニケーション研究所

## 2005年度活動報告

### (1) 研究プロジェクト紹介

#### ●アメリカ研究プログラム(継続・2年目)

代表: 高杉忠明(本学英米語学科・教授)

研究分担者: ギブソン松井佳子(本学異文化コミュニケーション研究所・副  
所長、英米語学科・教授)

福田守利(本学国際コミュニケーション学科・教授)

柳沼孝一郎(本学スペイン語学科・教授)

阪田恭代(本学国際コミュニケーション学科・助教授)

興柁一郎(本学中国語学科・助教授)

武田明典(本学一般教育・助教授)

黒崎 誠(本学英米語学科・講師)

榊本智子(本学国際コミュニケーション学科・講師)

吉田光宏(本学国際コミュニケーション学科・講師)

〈研究期間〉 2004年4月～2006年3月

〈研究概要〉 新たに4名のメンバーが参加し、現在、上記のメンバーの下で、Adalberto Aguirre, Jr. and Jonathan H. Turner, *American Ethnicity—The Dynamics and Consequences of Discrimination*, 4<sup>th</sup> edition, McGraw-Hill, 2004. の翻訳出版に向けて鋭意作業を進めている。2006年3月末には下訳が完成し、その後、編集・校正作業を行い、2006年度中には出版できる見通しである。

●ジェンダー研究会(最終年度)

代表: ギブソン松井佳子(本学異文化コミュニケーション研究所・副所長、  
英米語学科・教授)

研究分担者: 青山治城(本学一般教育・教授)

岩井美佐紀(本学国際言語文化学科・助教授)

小菅伸彦(本学国際言語文化学科・教授)

児玉顕栄(本学附属ミレニアムハウス・副館長)

ヒダシ・ユディット(本学国際コミュニケーション学科・教授)

藤田知子(本学一般教育・教授)

白 盛琇(本学国際コミュニケーション学科・講師)

山領健二(前本学附属図書館長)

〈研究期間〉 2001年4月～2006年3月

〈研究概要〉 5年間にわたる当研究会の最終年度は、『本はおもしろい別冊——ジェンダー生と性を考える50冊』の2006年3月発行にむけての実質的な準備セッションと編集作業となった。特に後期に入ってからほぼ2週間ごとに、報告者(青山、菊池、岩井、山領、ペク、中山、小菅、藤田土田(諸))による選択図書についてのプレゼンテーションと活発なディスカッションを行い、ジェンダー概念とそれに付随する問題の射程の広さを認識することができた。またジェンダーをめぐる視点の多様性および理論と実践における複雑な錯綜状況も確認するに至った。ジェンダー概念は時空を超える。ジェンダーという概念を〈生きること〉と不可分な諸相につなげて考えるとき、セックスとセクシュアリティという概念との関係性を考慮せざるを得ない。今回の『本はおもしろい別冊——ジェンダー生と性を考える50冊』はジェンダーの問題意識をさまざまな切り口で取りあげ、イデオロギーの主張、本質論VS構築論の不毛な二元論に縛られるのではなく、わたしたちの先入観や差別的価値観への気づきに少しでも貢献できるのではないかと考えて柔軟な発想で編集をした。学内のジェン

ダーに興味ある学生や教職員の役に立つことを願っている。

●「日本のインドネシア人社会」（継続・3年目）

代表: 奥島美夏(本学異文化コミュニケーション研究所・講師)

研究分担者: 安里和晃(大阪外国語大学・非常勤講師)

池上重弘(静岡文化芸術大学・助教授)

坂井 隆(上智アジア文化研究所・研究員)

田口理恵(東海大学・助教授)

ティルトスダルモ、リワント(インドネシア科学院社会文化研究所・上級研究員)

服部美奈(名古屋大学・助教授)

プジアストゥティ、トリ・ヌケ(インドネシア科学院政策研究所・研究員)

皆川厚一(本学国際言語文化学科・講師)

目黒 潮(東京都立大学大学院理学研究科・修士課程)

山口裕子(吉備国際大学・非常勤講師)

吉田正紀(日本大学・教授)

和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所・所長、国際コミュニケーション学科・教授)

\*その他、研究補助者数名

〈研究期間〉 2004年4月～2007年3月

〈研究概要〉 2004年度の茨城県大洗町調査(『異文化コミュニケーション研究』17号参照)に続き、本年度は中部地方のインドネシア人労働者や留学生、研修生などの多くが形成するムスリム・コミュニティについて学際的共同調査を行なった。また、家事・介護労働者や研修生として世界各地に進出しているインドネシア人労働者の実態に迫るため、日本と同様に比較的近年に大量のインドネシア人移民を受け入れたオーストラリアやアジア

NIEs 諸国などとの比較研究も行なった。その成果は、2006年2月4日に本研究所主催ワークショップにて討議され(池上、安里、目黒、プジャストゥティ、ティルトスダルモ)、一部は本誌次号に論文としてまとめられる予定である。

さらに、最終的な研究成果集『日本のインドネシア人社会』の刊行可能性について編集会議をひらいて検討した。今後のプロジェクトでは多文化共生の積極的側面に関する研究をさらに広げ、国際結婚、在日主婦のエンパワーメント、日系人会などについての報告会を開催する予定である。

## (2) ワークショップ記録

### ●異文研共同研究プロジェクト「日本のインドネシア人社会」第2回公開ワークショップ

「インドネシア人移民の国際比較——オーストラリア、東アジア NIES 諸国、日本の現在」

(2006年2月4日、於: TKP 四ツ谷第二会議室)

〈プログラム〉 (＊日本語・インドネシア語同時通訳付)

報告1 「オーストラリア、シドニーにおけるインドネシア人コミュニティと自助組織」

池上重弘(静岡文化芸術大学・文化人類学)

報告2 「東アジアにおける家事労働の国際商品化とインドネシア人労働者の位置づけ」

安里和晃(大阪外国語大学・経済学)

報告3 「日系ミナハサ族にみる大洗町から他地域への転職パターン——直接雇用から間接雇用へ」

目黒 潮(東京都立大学大学院・人文地理学)

報告4 「中部地方のインドネシア人移民コミュニティ——起源と適応」

リワント・ティルトスダルモ(インドネシア科学院社会文化研究所・社会人口学)

報告 5 「愛知県におけるインドネシア人とイスラーム組織の役割」

トリ・ヌケ・プジラストゥティ(インドネシア科学院政策研究所・政治学)

総合討論

(＊前出の共同研究プロジェクト報告も参照のこと)

(3) 学内講演会報告

- 第 39 回 (5 月 24 日) 〈スライド上映会と対話〉「絶望の中のほほえみ——カンボジアでエイズと向き合って」

後藤 勝(フォトジャーナリスト)

グローバリゼーションが人、情報、モノなどの世界規模の移動と混淆をもたらしたとすれば、エイズ(ここでは HIV 感染を含めて総称する)はその影の側面、ないし負の遺産のひとつといえる。とくにアフリカやアジアでは、続く内戦や貧困問題のためにエイズが爆発的に広がり続けている。国連エイズ合同計画(UNAIDS)の推計によれば、2010年までに中国、インドを中心とするアジアはエイズの最大感染地域になるという。日本でも昨年エイズ患者が1万人を突破し、「関心は高まらず、『感染者は横ばい、患者は減少』という多くの先進国とは対照的」(朝日新聞 2005年5月16日)という現状で、他人事ではない。

東南アジアでは、内戦が170万人の犠牲者を出して1990年代末にようやく終結したカンボジアが、もっとも深刻な状況にある。当地でエイズ感染者が初めて発見されたのは1991年のことで、その頃の感染者は性産業関係者がほとんどであった。だが、内戦のためにエイズに関する教育がゆきわたらず、内戦で難民となった人々の中に児童もふくめて売春に従事する者が増えると、たった4~5年で爆発的にエイズ感染者が増加したという。さらに、そうした売春婦たちを買う兵士たちが感染し、兵士から主に妻たちを通じて家族にも広がっていった。現在、感染者は17万人にのぼると言われる。パーセンテージ上ではピーク時よりやや減少しつつあるものの、そ

れは90年代には感染者であった兵士が、2000年以降にはその妻や子らが次々と亡くなったためである。現在、20歳以上の感染率は54.8%で、内戦を生きのびた24歳以下の若い世代にも広がっている。

講師の後藤氏は、従軍取材で1994年に初めてカンボジアを訪れて以来、ポル・ポト時代の激戦地・バッタバン州を中心に、兵士やその収容病院、荒廃する市街などを撮影し続けてきた。内戦後の病院に、かつて収容されていた負傷兵に代わって、おびただしいエイズ患者が効果的な治療を受けられないまま暮らしているのをみて、内戦がまだ本当の意味では終わっていないことを悟り、再び取材にとり組んだ。為すすべもなく無気力に生きる感染者やその家族ばかりでなく、彼らに対する近隣住民の差別、孤軍奮闘する現地医師、痛み止めの薬やわずかな生活費をもって毎日見舞いに奔走するNGO職員、7割方は買春経験があるがコンドームを使いたがらない男性たち、そしてエイズの危険性を理解していながらも生きるために客をとり続ける売春婦などとの出会いを通じて、それぞれの想いや信念を受けとめながら写真集『絶望の中のほほえみ』を完成させた。

カンボジア政府は内戦締結後ようやくエイズ対策に乗り出し、2002年にエイズ対策法を可決した。しかし、財政難のためにエイズの十分な感染予防対策ができていないとはいえず、地元のNGOなどが個々に活動しているのが実情だ。もっとも急がれているのは学童、売春婦などへの教育とコンドームの配布である。また、売春以外の職業訓練、感染者と家族のカウンセリング、民間薬などを使った伝統療法の試みなども行われている。先進諸国で唯一「エイズ後進国」の日本も、カンボジアの事例から学ぶべき事は多いはずである。とくに、これから恋愛や結婚、出産といった人生の諸段階を迎える若者たちに、世界が直面しているエイズ問題に向き合い、何をしなければならぬかを考えてもらうためにも、講師はカンボジアからのメッセージを世界に発信していきたいと語った。

〈参考〉

後藤 進 1999 『カンボジア——僕の戦場日記』 めこん

——— 2005 『絶望の中のほほえみ——カンボジアのエイズ病棟から』 めこん

●第 40 回 (6 月 7 日) 「異文化に生きる——自分の可能性を切り開くには!」  
高木香世子(マドリード自治大学助教授)

学生時代は外国語を専攻し、国際交流基金ではさまざまな芸術文化企画を手がけ、スペイン人外交官との結婚を機に欧米で通訳・翻訳家としても活躍し、現在はマドリードで教鞭もとる講師は、世界股にかけける国際人の典型である。だが、「すべては成り行き上で選びとった結果。自分がおかれた状況で出来ることを考え、精一杯努力しただけ」と慎ましく語る姿は、大学時代の学生紛争、女性に対する就職の門戸の狭さ、仕事と結婚・育児の両立など、数々の苦労や気負いを感じさせない。もの柔らかな口調で、異文化・多文化の中の「日本」とは何かを、ざっくばらんなライフヒストリーから紹介してくれた。

日本のキリスト教系ミッション学校では伝統的に外国語教育が盛んである。スペイン修道会付属高校を卒業した講師は、スペインについてもっと知りたいと考え、大学でもスペイン語を専攻したが、初めから特定の研究分野やテーマをもっていたわけではなかったという。しかし、学園紛争の時代にあって国内で勉強することが難しくなり、ひとまず留学し、海外での就職を考えるようになる。その一方、仕事にうちこめば結婚出来なくなってしまうのか、女性でも自立出来るレベルの仕事が本当にあるのか、など当時の日本社会における現実問題にも悩まされた。そんななか、国際交流基金の男性枠に応募し、「お茶くみ」兼英語通訳員として採用されたという。だが、めぐってきた機会を活かして、ロンドンでの「Japan Style 展」(1980 年)をはじめとする国際展に参加して日本文化を紹介する展示企画を成功させていく。

次の転機は、スペイン人外交官との結婚という形でやってきた。数年ごとに夫について赴任先の外国で暮らす道を選んだ講師は、外交官夫人として天皇やスペイン首相などの通訳も引き受けながら、2 人の子供も産み育てた。また、日本文化を紹介する仕事は執筆・翻訳として続けられ、日本食の芸術性を解説した *El Arte de la Cocina Japonasa* (共著 1999 年、フランス料理本コンクール外国料理部門最高賞受賞) や、博士論文の主題でも

ある日本の伝承文学における女性の役割を研究した『竹取物語』(2002年)の訳本などとして出版された。

現在、講師はマドリード自治大学東アジア専門課程で日本研究専攻科主任として後進の指導にあっている。クラスは日本文学、芸術史、文化人類学などで、日本について学びたい学生たちが毎年大勢入学してくる。だが、いわゆる日本学が盛んになったのは最近のことで、90年代初めは欧州で日本語を教える日本人はわずかしかおらず、さらに博士号ももつ者はほとんどいなかった。そのような状況で、講師の学生時代の留学経験や、スペイン人である夫との生活といった自身の体験は、異文化をよみとく視座などを指導する上で大いに役に立った。

こうして講師はスペインにおける日本文化の紹介者・教育者の草分けとなった。的確な状況判断や自分のもつ希少性を活かす発想は、国際舞台でのキャリア形成には重要であるといえる。海外暮らしや国際結婚には困難ももちろん多々あるが、講師の述べるように「人は共通点を見つけてわかりあうもの」と前向きにとらえ、その時々状況に応じて長所を最大に活かすことが、これからの若者が異文化の中で自己実現を果たしてゆくための鍵となるだろう。

〈参考〉

- Shiono, Shuji & Kayoko Takagi. 1999. *El Arte de la Cocina Japonesa*. Yenny. (『日本食の美』)
- Takagi, Kayoko. 2002. *El Cuento del Cortador de Bambú*. Madrid: Trotta S. A. (『竹取物語』)

●第41回(11月29日)《東アジア・コミュニティ形成の課題と展望・1》  
「中国激流——13億のゆくえ」

興梠一郎(本学中国語学科助教授)

2005年4月に中国各地でおきた日本の経済進出に対する突発的なデモと暴動には、多くの日本人がとまどいを覚えただろう。この反日抗議の真意は、日本の国連常任理事国入りや教科書問題への反発からおこったのか、



それとも輝かしい経済成長を遂げる中国で積極的に進められていた日本との経済提携にあったのか。情報統制・報道規制下にある中国では、問題の実像をとらえるのが難しい。長年にわたって中国研究者・アナリストを務める講師は、高度経済成長をめざした「改革開放政策」の過程で土地を奪われた農民やリストラされた労働者が、近年中国各地で集団抗議事件を頻発させていることをあげ、今回の反日デモも利権集団化した官僚特権やそのとりまきに向けた中国民衆の怒りの表出、すなわち「民意のうねり」の一環であると考え。この「民意のうねり」こそが、急激な経済発展によるひずみに直面した現代中国をよみとくキーワードだ。

中国での集団抗議規模はここ 10 年間で 7 倍となり、2004 年は 7 万 4 千件、延べ 376 万人にのぼった。講師が紹介したいくつかの現地・海外メディアの報道から、そうした抗議事件の様子がうかがわれる。その多くは、地方開発の犠牲者となった農民たちと政府・企業との武力闘争や、偶然の事故や流言といった直接関係のないきっかけから噴出した下層労働者たちの暴動へと発展している。同様にして先の反日デモも、当初は公務員・下級官吏などのエリート層千人程が始めたところに、不満解消の場を求める出稼ぎ農民や下層労働者も殺到した結果、デモの「ハイジャック」という中国政府にとって予想外の事態になった、というのが実情のようだ。

こうした情勢の背景には、すでにみた強引な農地開発や、外資主導の経済成長、社会格差の二極化といった経済問題と、官僚の企業支配や汚職、民主化要求に対する言論統制などの政治問題とがある。講師によれば、中国では外資系企業が全体の 5 割以上を占めており、流通ではほぼ全面支配に達している。GDP も 7 割を貿易に依存し、これは今後の中国経済は外国とのパートナーシップなしには立ちゆかないことを意味する。その反面、技術開発に投資すべきところを海外からの購買にあてているため、国内産業の技術力は停滞し、結果として質の良くないものを割高に買わされるという悪循環に陥っている。実際こうした商品を恒常的に消費できるのは、13 億人の国民のうちわずか 3~6 千万人にすぎない。しかし、このごく一部の人が、先進国にとっては十分に大規模な市場なのである。その多くは役人で、税務署査察の義務などもなく、一方国民の大半を占める農民と

産業労働者は貧困にあえいでいる。外資依存体制もさることながら、いかにこうした二極化社会に中間層を増やし、税金を徴収するのかが、今後の重要な課題といえる。

そしてもっとも根源的問題である政治面では、政府の頂点である中央政治局常務委員会をはじめとして、省・市などの地方政府でも開発事業からんだ汚職や企業支配が露骨に行なわれており、監視体制の整備を求める声が高まってきた。そのほか、県・区レベルの選挙動向や知識人によるフォーラム形成などにも体制内改革勢力の台頭がみられ、「天安門事件」のような過激な反政府運動とはまた違った、ゆるやかな「草の根運動」が展開されつつある。こうして中国共産党は、このまま一党独裁で市場経済を強引に推進してゆくのか、三権分立体制へ移行するのか、いずれにせよ抜本的な改革の必要な正念場を迎えているのだ。

〈参考〉

興梠一郎 2002 『現代中国——グローバル化のなかで』岩波新書

——— 2005 『中国激流——13億のゆくえ』岩波新書

●第42回(12月16日)《東アジア・コミュニティ形成の課題と展望・2》  
「韓流から交流を考える」

林 史樹(本学韓国語学科講師)

韓国でも2005年3月に、以前から議論の続いていた歴史教科諸問題や竹島問題がふたたび加熱した。激しい抗議行動に日韓関係は揺れ、進行中だった交流イベントが中止されたり、姉妹都市提携まで破棄されるといった事態が相次いだ。日本においてはこの数年空前の韓国ブーム、すなわち「韓流」ブームが続き、映画や音楽のみならず観光や語学方面でも韓国の人気が急上昇したといわれている。また、2005年は日韓国交正常化60周年目として両国政府とも交流事業に力を入れていた。にもかかわらず、なぜこのような展開になったのだろうか。シリーズ第2回は文化人類学者を講師に迎え、過剰で偏ったこれらの文化交流・国際交流のありかたを見直してみる。

高橋 (1997: 29, 31) によれば、「交流」とは個人や団体・地域社会・国家といった任意の 2 者間にフィードバックの経路が確立され、それを通じて相互に依存しながら「新たな存在」を生み出し、この過程を繰り返しながら進化してゆくものだという。交流といえ、何でも一見明るく開かれ、平和をめざしているといった良い面ばかりが強調されがちだが、実際は問題点も多く、フィードバックがなければ本来の交流にはならない。その意味で、従来の日韓交流はまず植民地時代以来の支配や外交にはじまり、韓国の高度経済成長期には企業進出や労働力輸出、そして大衆レベルでは 20 世紀末からの日韓それぞれの文学・芸能ブームなど、総じてどちらかからどちらかへの一方的な外交や経済進出、文化輸出であることが多かった。

講師は近年の日本における韓流ブームをとりあげて、その源流はいわゆる中国をはじめとしたアジア NIEs 諸国(シンガポール、香港、台湾など)の経済発展にともなう韓国文化の流行にあるという。これらの国々で 1990 年代後半から大ヒットした韓国の映画やドラマ、大衆音楽などが、徐々に日本にも広がっていったようだ。21 世紀にはいると映画『シュリ』や連続ドラマ『冬のソナタ』によって空前の韓流ブームが巻き起こされた。一方、韓国にも日本ほどではないが「日流」ブームがあり、特に村上春樹や吉本ばななといった日本の若手文学者の翻訳本や、若者のファッションや食文化(和菓子、たこ焼き、居酒屋など)、日本人モデルなどが人気を博している。90 年代末まで韓国では日本文化禁止政策がとられ、録音物の違法販売やアンダーグラウンドの映画上映が行なわれていたが、98 年から 2004 年にかけて徐々に日本文化が解禁されたこともブームに拍車をかけた。

しかし、これはあくまで文化の往来もしくは輸出入が自由に行なわれるようになったという段階であり、個人間、あるいは学校や研究機関、二国間政府の間に断続的なフィードバックをとまなう「交流」が確立されるころまで達したとは言えない。だから竹島問題などが再燃した途端、日韓の自治体同士の交流や学校訪問といった企画までが中断されてしまったのだ。それはまた、たとえ芸能関係者や留学生などの間で交流が確立されているとしても、それをもって二国間の交流や外交関係も順調であると解釈することはできないということでもある。こうした交流のさまざまな側面

ないし段階を把握しながら、異なる国家・社会間の個々人が相互理解を深める交流をめざすようになれば、現在の韓流・日流ブームも意義あるものとなるのではないだろうか。

〈参考〉

高橋直子 1997 『国際交流の理論』勁草書房

林 史樹 2004 『韓国のある葉草商人のライフストーリー』お茶の水書房

- 第43回(2006年1月11日)「新春対談 ともに生き、ともに考える」  
ヒダシ・ユディット(本学国際コミュニケーション学科教授)  
山領健二(前本学付属図書館長)

私たちを乗せたまま「地すべり」のように日本が変動し、世界はめまぐるしく移ろい続ける。いま、私たちはどこにいるのか？ハンガリーという欧州周縁部から言語を通じて世界をみつめる言語学者と、幕末維新から21世紀にいたる150年の半分を日本で生きてきた歴史学者が講師となって、新たな年2006年に生きる私たちの「いま」「ここ」はどこなのかを、自身の半生をふりかえりながら、また教育者としての立場から語ってくれた。

ヒダシ・ユディット氏はハンガリーのブダペストに生まれた。ハンガリーは四方からの異民族の侵略に脅かされてきた歴史をもち、言語はウラル・アルタイ系に属し、人々も「ヨーロッパ人でありながらアジア意識」をもつ。そのような故郷の文化的多様性や欧州における周縁性を目のあたりにして育ったためか、小さな頃から言語に興味をいだいていたという。大学では言語学・コミュニケーション論を専攻し、1978年に当時の日本ではまだ珍しかったハンガリー人留学生として東海大学にも留学する。日本式風呂など慣れない生活に困惑する場面もあったが、ハンガリーと日本の言語構造や慣習に共通点が多いことには大いに関心を惹かれた。たとえば、ハンガリーでも日本と同様に人の名字は名前の前に来るし、住所の書き方も郵便番号以下、大きな行政区画から小さい方へと(県、町、通り、番地など)順に記入される。また、ハンガリー語文でも語順が日本語のそれとかなり似ているという。

こうしたことと直接関係するわけではないが、ハンガリーでは全般に日本語や日本文化に対する関心度が非常に高く、大学だけでなく高校から小学校までのレベルでも日本語教育が行なわれている。ヒダシ氏も1986年からブダペスト商科大学で教鞭をとるかたわら、日本など世界各地で客員教授や研究員として研究を重ねた。2001年より本学国際コミュニケーション学科教授に就任し、日本ハンガリー友好協会会長も務め、その功労を讃えて2005年秋の叙勲では旭日中綬章が授与された。言語への情熱はますます深まる一方で、ハンガリーと日本の架け橋としてこれからも活動したいという。

一方、戦前の東京に生まれた山領健二氏は、子供の頃から特に何かになりたいと思っていたわけではなかったという。青春時代から大学にかけての時期が日本軍の植民地支配と第二次世界大戦と重なっていた氏にとって、当時のもっとも強烈な記憶は慢性的な物資不足による「飢え」の感覚であった。これは60代以上の日本人の大半にも共通する記憶だろう。『日録20世紀』（講談社）の100年前（1906年）、60年前（1946年）、50年前（1956年）などの記事一覧を比べてみても、ちょうど終戦にあたる1946年のおもな記載事項は、圧倒的に食糧不足や配給、闇市などに関するものが多い（1月）。しかし、その10年後の1956年には、もはやその影などなかったかのように急速な復興を遂げつつあり、冬季オリンピックや美空ひばりのコンサート、南極探検寄金運動などの記事が満載されている。

このような時代のなかで、氏は歴史学・近代日本思想史を専攻し、その後文化放送プロデューサーを経て私立麻布学園教諭となる。本学には創立時から参加、教授・附属図書館長を務めて2005年に退職した。

先述の奇跡的な戦後復興によって先進国となった日本で教鞭をとりながら、氏はあらためて日本とは何か、そしてそこに生きる日本人とは何かを、その源流さかのぼって考えてゆく。それと同時に、戦後の教育現場が経験してきた教科書問題、入試制度、学園紛争などの問題がおきざりにされている現状を指摘し、本来は個性ある生徒と教師が自由につくりあげてゆくことができる学校が、次第に閉ざされてゆく傾向にあることに対して警告を発してもいる（山領1996）。

〈参考〉

徳永康元 2004 『ブダペスト日記』 新宿書房

HIDAS, Judit. 2005 『Intercultural Communication: An Outline』 三玄社

山領健二 1996 『学校を閉ざすまい——戦後教育の記憶のために』 彩流社

#### (4) その他の特別企画

●第1回幕張チャリティフリマ @KUIS (通称「幕チャリ」)(5月21日  
～22日)

【主催】 神田外語大学 CUP

【協力】 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所

【スタッフ】 学生ボランティア約60名

【助成】 ソニーマーケティング学生ボランティアファンド

【後援】 千葉市

【開催協力】 幕張公民館、幕張西公民館、幕張町内会、幕張西自治会、幕張  
新都心まちづくり協議会、(株)ロボットFAセンター、NPO法人グロー  
バル・スポーツ・アライアンス

【広報協力】 あさひふれんど千葉、オリンピック幕張店、住商ビルマネージ  
メント(株)、メッセアミューズモール、東日本電信電話株式会社千葉支店、  
「私たちのRADIO」

【協賛】 NTTコムウェア、旺文社、FM NACK5、ガーデンウォーク幕張、  
カルフル幕張店(イオンマルシェ株式会社)、(株)キッツ、キャドバ  
リー・ジャパン(株)、キャノン販売(株)、セイコーインスツル(株)、千葉  
幕張ロータリークラブ、東京ガス株式会社(幕張ビル)、(株)日本コンベン  
ションセンター(幕張メッセ)、日本リーバ(株)、(株)ニューオータニ・ホ  
テルニューオータニ幕張、(株)ピエトロ、富士通株式会社幕張システムラ  
ボラトリ、(株)プリティッシュヒルズ、プレナ幕張、ホテルグリーンタ  
ワー幕張、(株)ホテルザ・マンハッタン、ホテルフランクス、(株)幕張テ  
クノガーデン、幕張プリンスホテル、三井不動産(株)

当企画は授業から生まれた学生のアイデアと企画を大学が支援する形で実現したチャリティ目的のフリーマーケットである。幕張周辺では年中いわゆるフリーマーケットが催されており、「フリマ」のメッカといわれる。「自分たちの力で、地元でできることは何か」を考えてこの企画の着想にいたった学生たちは、学内および周辺地域の住民・企業に広く呼びかけて、得られた寄付品をもとに大学キャンパスにて開催した。

当日は両日とも快晴に恵まれ、来場者は約 1200 人にのぼった。今回のチャリティは補助犬(盲導犬・聴導犬・介助犬)の育成を目的としていることから、会場では山口亜紀彦氏(NPO 法人「レモンの会」)と介助犬オリーブによる講演会とデモンストレーションが行なわれた他、各学生サークルの協力によって来場者のために演奏・民族舞踊なども上演された。売上金 100 万円は全国盲導犬施設連合会に寄付された。

また、同時開催の国際親善サッカー大会には、日本人チームとして千葉大学、法政大学、瑞穂社会人チーム、神田外語 OB、神田外語学院・神田外語大学が、外国チームとしてはベトナム、中国、韓国、イギリス、フランス、ブラジル、パラグアイ、千葉 ALT 多国籍チーム、ELI 教員チームなどが参加した。

- 写真展とビデオ上映「スマトラ沖震災——被災地の状況と人々の暮らし」  
(展示: 5 月 30 日～6 月 4 日、ビデオ上映会: 5 月 31 日)

【資料提供】 インドネシア文化宮 (GBI)、メトロ TV (Metro TV)、スランビ・インドネシア新聞 (Serambi Indonesia)

【協力】 本学国際言語文化学科教員・学生有志

世界を驚愕させた 2004 年末のスマトラ沖地震は、死者と今なお行方不明の人々もあわせて約 24 万人の被災者を出したといわれる。震源地最寄りのインドネシア・スマトラ島北部のナングロ・アチェ・ダルサラーム州(旧アチェ特別州)は発生した津波によって十数万人が死傷し、その他マレーシア、タイ、スリランカなどのインド洋沿岸諸国にも大打撃を与えた。最大

被災地となったスマトラでは、何ヶ月にもわたる余震と住民の避難生活が続き、これに翌年3月のニアス島地震などの震災も重なっている。

本展示会は、アチェの地元新聞「スランビ・インドネシア」による映像資料と、アチェ人画家マフディ・アブドゥラ氏による風刺漫画や被災児童たちの体験にもとづく絵画を公開し、被災状況を日本にも広く知らせるとともに、支援を呼びかける趣旨で開催された。展示期間中には、インドネシアの24時間ニュース放送局・メトロ TV から提供された、被災後のアチェ市街地や救援ボランティアたちの様子を収録したニュース・ビデオの上映会も、アチェ・コーヒーの試飲とともに行なわれた。

これらの映像資料や絵画からは、美しい民族衣装を着た人々の祭典や日々の生活、重厚なモスクや貴重な古文書の保管されていた図書資料機関などが、一瞬にして想像を超える津波に襲われて崩壊した様子も含めて、被災直後の人々の恐怖と喪失感、深い悲しみなどが伺われる。さらに、風刺漫画からは長年の圧政と内戦に疲弊するアチェの政治情勢を、ニュース報道からは被災児童を引き取りに訪れた親族を装う誘拐、とくに15~25歳位までの若い女性の連れ出しが相次ぎ、こうした震災時にすら暗躍する「火事場泥棒」や人身売買の組織犯罪など、日本ではあまり報道されていない貴重な現状もうかがえる。学内外から訪れた参加者には、ブルドーザーで瓦礫とともに掘り出される遺体に無言で見入る学生たちや、無気力に襲われる老人や誘拐の危険にさらされた子供たちを守りたい、自分の地元や所属機関でも展示会を開催したい、などと申し出る者もあった。

資料提供元のメトロ TV 東京支局はインドネシアの最新ニュースや各地の民族文化などを紹介する情報発信基地「インドネシア文化宮」もプロデュースしている。また、スランビ・インドネシア新聞はアチェの州都バンダ・アチェで発行されている地元最有力紙であり、今回の津波で本社が半壊、社員のおよそ3割(59名)が死亡・行方不明となった。これらのメディアが支援活動に立ち上がり、現地の子供たちを物理的・精神的にケアする絵画指導とコンクール、出版物刊行などを、日本でもインドネシア文化宮を通じて全国30箇所近くで展示会や募金活動を行っている(義援金の趣旨・送付先については下記のウェブサイトを参照)。



インドネシアでは 19 世紀末以降、各地で断続的な地震に見舞われ、とくに 1990 年以降は死者・行方不明者数千人を出したフローレス地震、通貨危機や政情不安とあいまって暴動をひきおこしたジャワやスラウェシの地震などが相次いでいる(地図参照)。これは地震大国の日本にとっても他人事ではなく、神戸震災(1995 年)や新潟県中越地震(2004 年)などの記憶はまだ新しい。このスマトラ沖地震をきっかけに、日本は本格的に世界と連携した防災システムの構築にも乗り出した。世界で危機管理への意識が急速に高まるなか、臨海地域に立地する本大学もまた対応策を急いでいる。

〈参考〉

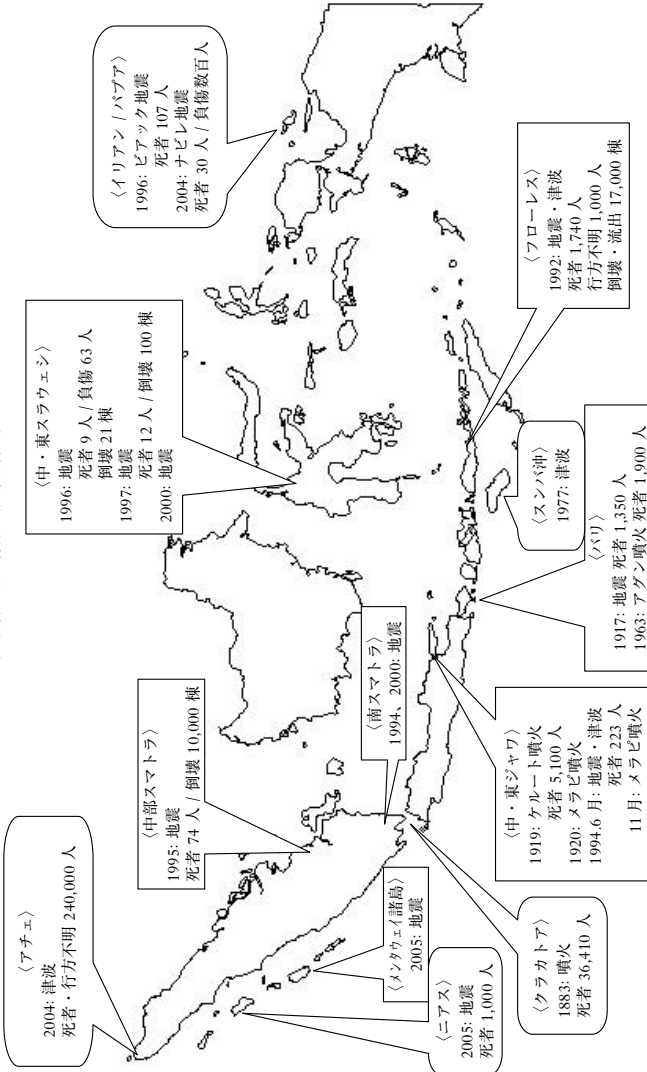
インドネシア文化宮 <http://clik.to/GBI>

スランビ・インドネシア新聞社 <http://www.serambinews.com/>

地図: インドネシア近現代史上のおもな地震と被害状況

(\*被害の人数・棟数は推計も含む)

(作成: 奥島美夏 2005)



出典: ウィンチエスター 2004 『クラカタアの大噴火——世界の歴史を動かした火山』 早川書房、  
ヴィックカーズ 2000 『演じられた楽園——バリ島の光と影』 新曜社、その他新聞記事など